


平成21年度購入文化財一覧

【奈良国立博物館】(計4件)

1	<p>○種 別 ○名 称  ○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等 ○作品概要  ○購入金額</p>	<p>&lt;書跡&gt; 華嚴經(二月堂焼経) 卷第二十四 (けごんきょう にがつどうやげぎょう) 一卷 奈良時代 8世紀 紺紙(麻紙) 銀字 卷子装 縦 23.5cm 長 969.9cm 東大寺二月堂に伝来した六十巻本(旧訳)『華嚴經』で、東大寺の修二会期間中に行われる実忠忌(旧暦2月5日)に用いられたものと考えられる。寛文7年(1667)2月14日、修二会の期間中に東大寺二月堂が火災に遭い、その際に焼損、焼け跡から発見されたものであるため、「二月堂焼経」と呼ばれている。現存する奈良時代唯一の紺紙銀字経であり、装飾経の貴重な遺例である。 34,650,000円</p>	
2	<p>○種 別 ○名 称  ○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等 ○作品概要  ○購入金額</p>	<p>&lt;工芸&gt; 玉虫厨子 模造 (たまむしのずし) 1基 大正十年(1921) 木製 黒漆塗 漆絵 金銅装 総高 226.0cm 基壇幅 137.2cm 基壇奥行 119.5cm 吉田立齋(1867-1935)が製作した法隆寺所蔵の玉虫厨子(原品は飛鳥時代)の模造で、大正十年の品である。本品は玉虫の羽根を金具の透かしに詰め込む点(原品は金具の下に敷きつけている)、漆絵のみで密陀絵の併用が認められない点、屋根の妻側に鉤形金具がない点など、原品との差異も認められるが全体としてきわめて忠実な模造品であり、現品の詳細な観察と確かな漆工技術の裏付けがあって初めて可能な高水準の模造とすることができる。 15,750,000円</p>	
3	<p>○種 別 ○名 称  ○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等 ○作品概要  ○購入金額</p>	<p>&lt;工芸&gt; 金銀平脱皮箱 模造 (きんぎんへいだつのかわばこ もぞう) 1合 近代(20世紀) 革製、漆塗、金銀平文、被蓋造 蓋 縦 27cm 横 32.3cm 高 6.7cm 身 縦 25.4cm 横 30.7cm 高 7.1cm 総高 8.1cm 正倉院宝物として中倉138に整理されている金銀平脱皮箱第4号の模造品である。原品は平脱技法(剥取平文)で金銀板が貼り付けられるが、本品は平文技法(研出平文)で文様が表されていると考えられる。外箱の蓋表に「寧楽 大閑堂監製」とあり、奈良漆器や古美術品を商った大閑堂(玉井久次郎)が製作させたものと推測される。大閑堂によって作られた精巧な正倉院宝物の模造である本品は、近代奈良の懐古趣味や正倉院宝物模造などの歩みを考える上で、重要な資料といえるであろう。 2,100,000円</p>	

4	<p>○種 別 ○名 称</p> <p>○員 数 ○時 代 ○品 質 ○寸 法 等 ○作品概要</p> <p>○購入金額</p>	<p>&lt;書跡&gt; 手鑑 (てかがみ)</p> <p>一帖</p> <p>奈良時代～江戸時代(8～17世紀)</p> <p>折帖装 紙本(一部彩牋) 墨書</p> <p>縦 39.5 cm 横 25.1 cm 厚 10.5cm 長 1580cm</p> <p>古人の優れた筆跡を鑑賞し、また書の手本とするために典籍の断簡等をアルバム状に貼り込む「手鑑」は、室町時代後期ころから作られはじめ、江戸時代に隆盛した。手鑑製作が盛んになるとともに筆跡の真贋を定め筆者を特定する鑑定家が登場し、手鑑の形にも定型が生まれた。手鑑の定型は折帖装の厚い台紙を用い、その表裏全面にわたって筆跡を貼り込むもので、本品も含め現存品のほとんどがこの形式である。本品の筆跡206葉の内容は、約半数が和歌集や物語といった古典籍の断簡(いわゆる古筆切)であり、それ以外では写経や聖教が10葉程度で先掲の類品に比べて少ない一方、和歌短冊が80葉以上あって全体の4割ほどを占める。</p> <p>18,900,000円</p>	
---	--	--	---

以上